

まちづくり勉強会「幸せをつくる街の必需品たち」開催結果

1 開催日時（会場）

令和8年8月22日（土）午後2時から午後4時まで（ササヤカフェ）

2 講師

- ・ 商い創造研究所 代表取締役 松本 大地 氏
- ・ 秦野市中心市街地活性化タウンマネージャー 伊藤 大海 氏

3 参加者数

34名

4 目的

- (1) これからの秦野に必要な「まちの豊かさ」や、暮らし・仕事の間として、「秦野を選びたい」と思ってもらえるまちのあり方について考えること。
- (2) 国内外の事例をヒントに、人とのつながりや居場所、まちのにぎわいを生み出す仕掛けを学び「これからの秦野にあったらいいもの・必要なもの」について考えること。

5 内容（株式会社商い創造研究所 松本 氏）

(1) 「豊かさ」の価値観が、“モノ”から“心”へ変化している

- ・ これまでの豊かさは「モノを所有すること」や「便利で大きな施設」に象徴されていた。
- ・ 現在は、「人とのつながり」や「心に残る体験」、「安心できる日常」など、心が豊かになることが重視される。
- ・ これからのまちづくりでは、施設の規模だけでなく、「ちょっと嬉しくなれる場所」や「心地よいと感じられる場所」が重要になる。
- ・ 公園や広場、カフェなど、目的がなくても自然と人が集まり、交流が生まれる場所がまちの新たな価値の創出につながる。



まちづくり勉強会「幸せをつくる街の必需品たち」開催結果

(2) 「社会交流力」が、まちの新たな価値になる

- ・これまでのまちの豊かさは、個人が自分自身の満足や自己実現を追求することに重きが置かれていた。
- ・これからは「自分が暮らすまちをより良くする」ことや「地域の仲間を大切にする」といった、**周囲とのつながりがもたらす幸福感**がより重要になっていく。
- ・**人と人とのつながりを通じて得られる幸福度が高いまち**こそ「社会交流力」のあるまちである。
- ・その象徴がカフェや広場などといった人が自然に集まる場所であり、単に飲食や休憩をするためだけではなく、子育て世代、高齢者、学生、地域住民など、様々な人が**安心して過ごし、交流できる「ステイアブル」な場**として、**これからのまちづくりの核**となり得る。

(3) オーストラリアの事例：「過ごしたくなる場所」がまちの幸福をつくる

- ・アートやカフェ、マーケットなどが街なかに存在し、歩くだけでなく「**歩いて楽しい、過ごしたくなる**」まちが形成されている。
- ・日常に「小さな幸福」を生むカフェは、食事やコーヒーだけでなく、**仕事の打合せや地域住民、子育て世代の交流の場として機能している**。メルボルン発の「ラテグラフィック」は、**居心地やホスピタリティにも価値を置く**好例である。
- ・質の高い食事と心地よい空間で過ごすことに価値を感じ、人が自然と集まる。こうした場所を、地域コミュニティの核となる「**フォースプレイス**」として捉えている。

(4) 国内の事例：「幸せをつくる街」とは

≪「誰のためのまちか」を明確にする（流山市）≫

- ・「共働きの子育て世代」に**ターゲットを絞り**、子育て支援・交通・住環境・商業を**一体的に整備**した。
- ・**「母になるなら、流山市。」という明確なメッセージ**で、「子育てしやすいまち」というブランドを形成。

≪「地域らしさ」を価値にする（和歌山市）≫

- ・全国チェーンではなく、鮮魚店や八百屋、地元飲食店など、“**地域に根付いた事業者を集める「ローカルファースト」**”を推進。
- ・商業施設やオフィス、市民図書館などを備えた「キーノ和歌山図書館」は、**駅を単なる交通結節点にせず**、人が集まり、過ごし、交流する「**まちの拠点**」となった。

(5) 商業施設を「消費の場」から「地域の場」へ

- ・これからのまちづくりでは、**商業施設の役割は大きな転換**が求められている。
- ・単発の集客ではなく、**地域の人同士が継続的につながる企画**（子育て相談、地域のマルシェ、学生の発表、ダンスイベント）を実施し、商業施設を消費の場から、**人が交流し、地域コミュニティが育つ場**へすることが大切。
- ・イベントや対話を通じて地域の人々やテナント同士の交流・コミュニティ形成を生み出し、地域の課題解決や活性化を目指す取り組みや空間を「**ギャザリング**」と言う。

(6) 既存の資産を活かし「小さな幸せ」を積み重ねる

- ・新しくつくることだけが、まちづくりではない。公共施設、空き家、空き店舗、公園、学校など、**今あるものを「まちの資産」として捉え直す**ことが重要である。
- ・行政、商店街、ホテル、図書館、商業施設などが単独で取り組むのではなく、**互いにつながり「まち全体」をつくっていく視点が必要**。
- ・人が集まり、会話し、安心して過ごせる場所や、日常の中にある「**小さな幸せ**」を一つひとつ増やしていくことが大切である。
- ・「**幸せをつくる街**」とは、便利で大きな施設があるまちではなく、**そこに暮らす人が「このまちで過ごしたい」「このまちが好きだ」と思えるまち**のことであり、秦野でいかにそれを見つけていけるかが大切である。

まちづくり勉強会「幸せをつくる街の必需品たち」開催結果

6 質疑応答

Q1 秦野市のポイントとなる場として水無川を挙げていたが、どうしたら更にインパクトが出ると思うか。

A1 水無川は、秦野ならではの「唯一無二の資産」になり得るのではないかと。川沿いを歩き、緑を感じながら日常を過ごせる環境は大きな魅力である。今後は、単に川を整備するのではなく、「10年後には水無川をこんな場所にしたい」という将来像を描き、川沿いのカフェや広場など、周辺のさまざまな場所とつなげていくことが重要である。また、水無川が現在の姿になるまでには、地域の人々が水を大切にしてきた歴史がある。その「水へのリスペクト」を忘れず、自然を守りながらさらに景観や過ごし方を良くしていくことが、秦野らしいまちづくりにつながるのではないかと。

Q2 オーストラリアのメルボルンは、世界一住みやすいまちに選ばれ続けているが、多文化・多言語の都市であるため、カフェの本質である「語り場」が無意識的に社会交流の体験の場として機能し、生活や文化に根付いているからと考えられるか。

A2 メルボルンは、カフェなども、単なる飲食の場ではなく、異なる文化や人々が自然に交わるコミュニティの場になっている。大切なのは、異なる価値観を否定するのではなく、それも面白いと「認め合う」こと。その積み重ねによって、新しい文化や交流が生まれていく。

Q3 キーノ和歌山の店舗誘致がどのように進んだのか聞きたい。

A3 行政だけでは個々の不動産や店舗の調整まで全てを担うことは難しいが、不動産事業者は個々の物件を埋めることが目的になりやすく、エリア全体の方向性がなければ、まちがバラバラになってしまう。そこで、行政と民間の間に入り「このエリアをどんな場所にしたいのか」を考えながら、地権者や事業者、店舗などをつないでいく役割の「まちづくりDeveloper」となって、エリアの方向性を守りながら誘致を行った。

まちづくり勉強会「幸せをつくる街の必需品たち」開催結果

Q4 大学生などの「関係人口」をまちづくりに生かすには、どのような方法があるのか。

A4 大学生を単なるイベントの参加者としてではなく、**まちづくりの実践者として巻き込むこと**が有効である。例えば、建築や都市計画を学ぶ学生に、地域のテーマを与え、実際のまちをフィールドとして調査や提案をしてもらう。「町と水の関係」「水無川の景観」「店舗や公共空間のあり方」など、地域ならではのテーマを行政、大学、地域住民と一緒に考えることで、学生にとっても実践的な学びとなり、地域にとっても新しい視点を得ることができる。

Q5 次に秦野で社会実験を行うとしたら、どのような取り組みが良いか。

A5 単発のイベントではなく、**地域の「ライフスタイル」につながる仕掛け**を考えることが重要である。例えば、川沿いにテラス席を設け、飲食を楽しみながら水辺を眺められる空間をつくるなど、普段の暮らしの中に自然に取り入れる方法もある。台湾の夜市のように、家族や働く世代が日常的に出かける場所を参考にしながら、**秦野ならではの食や水辺の魅力を組み合わせる**。小さな社会実験を重ね、「これは良い」「もっと続けたい」というものを少しずつ育てていくことが重要である。

7 感想・自由意見

- ・ ウォークブルが発展して、ステイアブル（滞在できる）、いい言葉だと思う。秦野でも試行錯誤したい。
- ・ フォースプレイス場として、カフェと本を用いての対話、交流ができる場がまちなかに増えていくと、よい文化の交流の場が増えていくと思う。まちなかに秦野の文化や、山、音楽にちなんだ活動のハレの場を増やす仕組みを考えたい。
- ・ キーノ和歌山の市立図書館の内部構成は、参考にすべき一つの事例だと思う。
- ・ 「朝が楽しい街」ライフスタイルに繋がる秦野の街コンセプトを見つけていきたい。親身に語っていただくいい勉強会だった。
- ・ まちと商業と官民のこれからの仕組みづくりと表にはみえない徹底されたマーケティング調査、都市再生推進法人制度の話聞いたのは勉強になった。